

「喜多方発21世紀シアター2022| 参加 ラストラーダカンパニー 『らふぃゆ れふぃゆ』 写真提供: ラストラーダカンパニー

## [児童青少年演劇]

# コロナ禍を超えて復活した 夏のフェスティバル

## 太田 昭

2022年の児童・青少年演劇界は、少しずつではあるが回復の兆しがあるように思えた。 まるまる2年間、演劇鑑賞会だけでなく、入学式や卒業式など多くの学校行事がコロナ禍 のために見送られてきた。子どもたちにとって、学校生活での思い出がマスクと消毒の日々 では何とも切ない思いになってしまう。そんな中、先生方の対応にも変化があり、学校での 演劇鑑賞会が実施しやすくなってきたようだった。しかしながら、相変わらずコロナ禍は続き、 2020年当初は観客側の陽性者や、感染拡大防止の観点から見送られてきた上演が、現 在は、出演者・アーティスト側に陽性者が出たりすることで上演が中止・延期になる例が増 えている。上演へのハードルが低くなってきたように思えるが、困難は続いていると言わざる

を得ない。

国が学校や子どもたちに対して求めるコロナ対策の基準が曖昧で、自治体任せであるため、上演場所、上演ごとに違った対応を迫られ、創造団体側も非効率的な上演の連続に疲弊する声が聞こえてきている。特に「密を避ける」ということが上演の条件になってくると、1日に2ステージは当然で、3ステージ、またはそれ以上の上演回数を迫られるという話も聞いている。そして、その増えたステージ数の上演料は残念ながら補償されることはなく、ただただ創造団体側が割を食う状況が継続している。そういう意味では、上演数が増えたことが、必ずしも状況が回復しているとは言えないのが現状だ。

#### 復活した夏のフェスティバル

そんな中、児童・青少年の演劇界での大きなトピックに、夏のフェスティバルの復活があげられる。子どものための舞台芸術フェスティバルは、毎年夏、全国数か所で実施されてきた。コロナ禍により、ストップしていたり、オンラインや規模を縮小して実施されていたりとさまざまだったものが、有観客でのフェスティバルに取り組む姿が見られるようになってきている。ここで今年開催された国内の児童青少年演劇フェスティバルを紹介したい。

50回目を迎えた「夏休み児童・青少年演劇フェスティバル」(7月23日~8月1日、こくみん共済coopホール/スペースゼロ)は、日本児童・青少年演劇劇団協同組合(児演協)が主催して、古くは渋谷の東京都児童会館で継続して実施されてきたもので、2012年

の同館閉館後は、現在のスペースゼロに会場を移して実施している。創造団体が主体となって実施しているフェスティバルで、共通チラシや宣伝など参加団体が共同の団体鑑賞など毎年都内の子どもたちが心待ちにしているフェスティバルだ。

「りっかりっか\*フェスタ 2022」(7月23~31日、 那覇文化芸術劇場ほ



第50回「夏休み児童・青少年演劇フェスティバル」参加 スタジオ・ポラーノ 『双子の星~チュンセとボウセの空の大冒険~』 撮影:スタジオ・ポラーノ

か)は、以前は沖縄市を中心に「キジムナーフェスタ」として開催されていた国際フェスティバルが、場所や名前を変えて継続している国際フェスティバルだ。前年度は2021年1月に行われ、海外作品はリモートのみだったのが、今夏は海外から8作品が来日して上演することができた。昨年、日本で開催された第20回アシテジ世界大会に参加を予定していながら来日できなかった作品が多く招聘されており、LIVEでの観劇ができる喜びにあふれていた。

続いて、「子どもと舞台芸術大博覧会2022 in 甲府」(7月29日~8月1日、甲府市総合市民会館)は、一昨年まで毎年東京のオリンピックセンターで実施されていたが、東京オリンピックの影響で使用できなくなった昨年から、日本各地で実施する方針を打ち出し、仙台に続く2年目として甲府市で開催された。こちらは、甲府市の共催や周辺自治体の後援協力もあり、充実した広報により、多くの子どもたちの姿を会場で目にすることができたのが印象的だった。観劇だけでなく、体験も大きなテーマとなっており、ワークショップなどのコーナーもにぎわっていた。来年は新潟市で実施される。

福島の「喜多方発21世紀シアター2022」(8月5~7日、喜多方プラザほか)は、昨年



「子どもと舞台芸術大博覧会2022 in 甲府」参加 劇団なんじゃもんじゃ 『おじさんとおおきな木』 写真提供:劇団なんじゃもんじゃ

規模を大幅に縮小し実施してお り、今夏は満を持しての複数会 場での開催となった。20回目を迎 えた一昨年に中心の実行委員 会のメンバーの若返りをして以降 の大規模実施となったが、特徴 的なのは、創造団体と行政と市 民が一体となってバランスよく運 営されていることで、地方都市で のフェスティバルの理想の形と言 える。初代会長がこのフェスティ バルを立ち上げるとき「専業農家 である自分が、どこか別の場所に 行ってフェスティバルに参加したり はできなかった。それならば自分 たちの土地でやればいいことに気 づいた」とおっしゃっていたことは 忘れられない。その意志を継ぐ次 世代たちの活躍が期待される。

昨年中止となった長野の「キッズ・サーキット in 佐久 2022」(8月5~7日、コスモホールほか)は、今年はチケット発売とともに完売の公演が続出。まだ、そんなに歴史の長いフェスティバルではないが、地元佐久市民が心待ちにしていることがうかがわれた。

最後に紹介する大阪の「子どもえんげき祭 in きしわだ」(8月18~21日、岸和田市浪切ホール)は、29回目を迎えた今年が最後の開催となるそうだ。こちらは浪切ホールに1日いればすべての作品が観られるというコンパクトなフェスティバル。3作品観ると500円バックさ

れるというのも商人の町、大 阪らしい。そして特徴的なの が、すべての作品に「ゲキミ テトーク」という、作品を観 て語る会がついていることだ。 これは観客が感想を述べ あうのではなく、明日の創造 のために出演者と観劇した アーティストがメインで語り合 うものだ。これによって、作品 がブラッシュアップされた劇 団がいくつあることかと思う。 残念ながら、今年で岸和田 での演劇祭は幕を閉じるが、 来年度は神戸市灘区に場 所を移し、関西発信のフェス ティバルは継続されるとのこ とだ。

そして、残念ながら今年も中止となってしまったフェスティバルでは、「いいだ人形劇フェスタ2022」(8月4~7日)があげられる。上演か中止かの判断は非常に難しく、自治体やその土地の空気感で大きく違ってくる。こと



「キッズ・サーキット in 佐久2022」参加 劇団たんぽぽ 『ルドルフとイッパイアッテナ』 写真提供:「キッズ・サーキット in 佐久」 実行委員会



第29回 「子どもえんげき祭 in きしわだ」 参加 人形劇団クラルテ 『11ぴきのねこ』 写真提供:人形劇団クラルテ

フェスティバルに関しては、規模も大きく、人の往来も多くなる。一方で、こんなご時世だからこそ、という思いが大きくなっていることも実感した。無理はしないが、細心の注意を払いつつ、ガイドラインをきちんと設定したうえで上演するという現場の努力が2022年の熱い夏を実現させたと言える。

#### 舞台芸術との出会いを助ける公的支援

ここで、学校での演劇鑑賞会に話題を戻そう。前述したように、学校主催で実施する演劇鑑賞会が、コロナ前に戻ったかというと、まだまだそんなことはない。しかしながら、この状況を受けて、文化庁は、「子供のための文化芸術鑑賞・体験再興事業」を実施した。これは2021年度の補正予算を使ったもので、コロナ禍で多くの行事が中止にされ、舞台芸術との出会いができなかった児童・生徒のために公演やワークショップを実施するというもだ。これは昨年度にも実施された「子供のための文化芸術鑑賞・体験支援事業」の発展版で、作品を文化庁側が提案する「プログラム選択型」と、学校側が自分たちで選んだ作品を鑑賞できる「学校提案型」がある。とくに後者の「学校提案型」は、学校側が自由に選んだ作品に文化庁の公的補助をもらい、上演できるというもので、従来型の、作品を決められた中から選ぶという制約のない、自由度の高いものとなっている。この事業には予想を超える応募があり、関心の高さがうかがえた。

もう一つ、東京都も同様の事業を実施した。これは「子供を笑顔にするプロジェクト」と題して、公演事業だけでなく、講演会なども含めた学校現場での鑑賞・体験事業を実施するものだった。多くの統括団体を通じて、創造団体が作品や企画を提案し、学校側が実施したいものを選ぶというものだ。画期的だったのは、児演協が舞台芸術に関する事務作業を担ったことだ。また、これまで自校で鑑賞会を実施したことのない学校が応募するケースも多く、今後、この成果が発展していくことを願ってやまない。

こういった公的支援により、学校の経済的負担も減り、創造団体側も公演数が増え、失った公演を多少なりともカバーすることができた。そして経済的効果だけでなく、公演ごとに出会う子どもたちはもちろん、先生方の思いに触れることができた。私の所属劇団でも、多くの現場で担当の先生方の「私たちが心待ちにしていました」という言葉や「私たちが一番楽しみました」という言葉が多く聞かれ、学校における芸術鑑賞会の必要性を痛感した。どの年代においても、子どもたちが舞台を見る姿は、舞台そのものの魅力とともに、それを選択した大人の背中を押してくれるものだと思った。現時点では、来年度の学校での公演は、白紙が多かったり、条件付きであったりと、不安要素は多くある。しかしながら、今回コロナ禍で実現した新たな事業などの発展形が、現場からは望まれている。

### 秀作のリメイクとノンバーバル作品

最後に今年観劇した中からいくつかの作品を紹介したい。

演劇集団円『キレイちゃんとけだもの』(原作:ニコラス・S・グレイ、訳: 菊池章一、上演台本: 谷川俊太郎、演出:小森美巳)は、以前『美女と野獣』というタイトルで上演した作品のリメイク版。久しぶりの子ども用さじき席もあり、出演者・スタッフも上演の喜びにあふれていたステージだった。特に狂言回し的に客席の子どもたちに寄り添うお兄さん役が秀逸で、セリフ劇で子どもたちが逃してしまいそうな言葉やシーンを補ってくれる。それによって、小さな子たちも最後まで楽しむことのできる作品だった。

ラストラーダカンパニー『らふぃゆ れふぃゆ』(演出:LONTO)は、カンパニーメンバーの 2人に加えて、音楽家のシモシュをゲストに迎えての上演。言葉のない物語で、あったかく て、心地よく、そして最後まで楽しい作品。観客は大人から子どもまで、みんなが3人を好き になってしまうような作品で、音楽はもちろん、落ち葉舞い散る舞台美術、衣裳、それに3人 のしぐさまで、全部おしゃれに見えてしまう舞台だった。

アートインAsibina 『ゴンゾウ爺さん街を行く』& 『PAPER PARTY』(演出:叶雄大)は、こ



演劇集団円『キレイちゃんとけだもの』 撮影:森田貢造

ちらもノンバーバル作品で、二本立て。『PAPER PARTY』はこの劇団の得意分野、紙を使った遊びから物語が生まれていく作品で、安心して観ていられる。でも、なんと言ってももう一作品が抜群に面白かった。ノンバーバルの手法を生かして、客席と舞台上で起こっていることの合意を作りながら、少しずらしていくのは演出の手腕。子どもたちは、期待どおりだったり、予想外だったりすることに、次のシーンへの期待がさらに膨らんでいく。良質のコントのようで、家族で楽しめる作品だった。

2023年も厳しい状況が予測できるが、アーティストはどんな時もユーモアを持って子どもたちの前に立っていたいと思っている。まだまだ書きされないことが多くあるが、できるだけ多くの作品、多くのアーティストたちが子どもたちと出会えることを願ってこの稿を終わりたいと思う。

#### おおた・あきら

1996年、東京演劇アンサンブル入団。以降、ほとんどの作品の制作にかかわる。日本児童・青少年演劇劇団協同組合の人材育成担当理事として、多くの講座・ワークショップを担当している。2004年、文化庁在外研修員としてスウェーデン国立劇場 (Riksteatern) の児童青少年演劇部門 (Unga Riks) へ短期留学。現在、日本ベイビーシアターネットワーク代表、日韓演劇交流センター副会長などを務める。

214